

敬語を経年の的に見つめる¹

杉戸清樹 (国立国語研究所)

朝日祥之 (国立国語研究所)

1. はじめに

本ワークショップでは、国立国語研究所の第三次岡崎調査を事例として、「敬語を経年の的に見つめる」調査研究をより広く議論することを目指す。

国立国語研究所では、敬語と敬語意識について1953年と1972年に愛知県岡崎市で調査を実施した(国立国語研究所1957, 1983)。人口動態の活発化にともなう地域社会の変容と言葉の関係、特に敬語使用基準の変化や多様化の把握は、第一次調査からの研究課題である。これまでの調査から、社会の変化によって敬語の使い分けの幅が広がったり、敬語意識に変化が生じたりしていることが示されている。

第二次調査以降の日本社会も大きく変化している。そこで、国立国語研究所では文部科学省科学研究費補助金(基盤研究(A))を受け、2008年に第三次の調査を企画・実施することになった。第一次調査が行われてから半世紀の間における敬語使用と敬語意識の変遷を解明するためには、これまでの調査を踏まえた経年調査を行うことが不可欠である。

同時に、近年の敬語をめぐる調査研究では、従来の枠組みを継承・発展させたものが盛んになっている。経年調査を実施するにあたって、敬語と敬語意識をめぐる諸問題にどのような姿勢で取り組むべきなのか、検討を慎重に重ねる必要がある。

そこで、本ワークショップでは、現段階での調査計画を示し、調査を構成する調査班のメンバーから、これまで議論してきた事柄を事例として紹介する。それを受けて、敬語という言語事象を経年の的に見つめることの課題について、フロアと意見交換しながら考えていく。

2. 第三次調査に向けた枠組み

岡崎での敬語・敬語意識調査を実施するにあたって、国立国語研究所では、次に述べるように、国立国語研究所の研究者と国内の研究者による調査体制を採ることとした。それぞれの調査の方針と担当者をまとめておく。

(1) 経年調査班

方針：第一次・第二次調査で行われてきた調査を再検討し、第三次調査の枠組みを構築する。これまでなされてきた調査内容を継承することを基本とする。

担当：杉戸清樹、尾崎喜光、朝日祥之、磯部よし子(国立国語研究所)、井上史雄(明海大学)、江川清(広島国際大学)、真田信治(大阪大学)、松田謙次郎(神戸松蔭女子学院大学)、松丸真大(滋賀大学)。

(2) 新規調査班

方針：敬語と敬語意識をめぐる最近の研究動向をふまえた上で、経年調査に取り込むべき項目を提案する。それと同時に、新しい視点からの新しい調査を企画・実施する。これまでにない調査、今後のための調査に視点を定める。

担当：横山詔一、熊谷智子、吉岡泰夫、高田智和、阿部貴人(国立国語研究所)

(3) 記述調査班

方針：記述的研究の立場から敬語、待遇表現に関わる言語形式の意味機能を整理する。調査データのもつ待遇価や岡崎市方言全体からみた調査データの位置づけを明らかにすることに主眼を置く。

担当：大西拓一郎、朝日祥之、塚田実知代、阿部貴人(国立国語研究所)、西尾純二(大阪府立大学)、久木田恵(愛知教育大学)、辻加代子(甲南大学)

3. 本ワークショップで検討する事柄

第三次調査を実施するに向けて検討すべき事柄は実に多い。その中で、本ワークショップでは、特に次の4点を取り上げる。

(1) 国立国語研究所でのこれまでの経年調査・敬語の調査から見た敬語・敬語意識研究の在り方

国立国語研究所による経年調査は、山形県鶴岡市や北海道での共通語化に関する調査研究(国立国語研究所1953, 1965, 1974, 1997, 2007)、及び岡崎市における敬語についての調査研究がある。また敬語については、松江24時間調査(国立国語研究所1971)、企業内の敬語(国立国語研究所1982)、学校の敬語(国立国語研究所2002, 2003)などの調査研究が挙げられる。ここでは、岡崎調査の持つ特性を、経年調査、及び、敬語調査の二つの視点からまとめる。そこから、第三次調査として求められる調査の枠組みを提案する。

(2) 海外におけるこれまでの経年調査から見た敬語・敬語

意識研究の在り方

海外の社会言語学における言語変化研究のうち、とりわけ経年調査にもとづく研究で取り上げられてきた調査研究を概観する。欧米を中心とした社会言語学において、「見かけ上の時間」について実時間データをもとに再検討が加えられていること、そうした流れの中での岡崎調査の位置づけを試みたことなどを指摘する。それらの成果をもとに、国立国語研究所が行う調査研究が海外の社会言語学的研究に対して果たす貢献の在り方を提案する。

(3) 言語行動の仕方や敬語観、ポライトネス、言語生活研究などの研究動向をふまえた敬語・敬語意識研究の在り方

敬語・敬語意識に関しては、ポライトネス (Brown & Levinson 1987) や談話分析、会話分析など、様々な見地からの研究が盛んである。この他にも、言語行動の仕方や文字をはじめとした書き言葉の丁寧さ、言語生活全般に関する調査研究も行われている。これらの研究動向をふまえた上で、「敬語とは何か」という視点も含めて第三次調査として求められる調査の枠組みを提案する。

(4) 待遇表現の体系記述研究の視点から見た敬語・敬語意識の在り方

敬語研究の多くは、言語運用面に見られる現象を扱うものである。そこで、その運用だけでなく、表現形式についても考察を試みる。宮治 (2003) で整理された待遇表現に関する調査の枠組みなどを参考にしながら、第三次調査として求められる調査の枠組みを提案する。

4. 本ワークショップで議論したい課題

本ワークショップでは、上に挙げた点を事例として検討しながら、以下に述べる点を議論したい。

- (1) 敬語を見つめることの課題
- (2) 言語事象を経年的に見つめることの課題

5. 本ワークショップの構成

- (1) 企画説明 (杉戸・朝日)
- (2) 話題提供 1 : 経年調査で敬語の変化をつかまえる (朝日)
- (3) 話題提供 2 : 海外における実時間言語調査の動向と岡崎敬語調査 (松田)
- (4) 話題提供 3 : 「敬語」をどうとらえるか (熊谷)
- (5) 話題提供 4 : 敬語・待遇表現の「記述」—第三次岡崎調査に向けて— (西尾)
- (6) 全体討論

参考文献

- 国立国語研究所. (1953). 地域社会の言語生活 鶴岡における実態調査. 秀英出版.
- 国立国語研究所. (1957). 敬語と敬語意識. 秀英出版.
- 国立国語研究所. (1965). 共通語化の課程—北海道における親子三代のことば—. 秀英出版.
- 国立国語研究所 (1971). 待遇表現の実態—松江 24 時間調査資料から—. 秀英出版.
- 国立国語研究所. (1974). 地域社会の言語生活—鶴岡における 20 年前との比較—. 秀英出版.
- 国立国語研究所. (1982). 企業の中の敬語. 三省堂.
- 国立国語研究所. (1983). 敬語と敬語意識—岡崎における 20 年前との比較. 三省堂.
- 国立国語研究所. (1997). 北海道における共通語化と言語生活の実態 (中間報告). 国立国語研究所.
- 国立国語研究所. (2002). 学校の中の敬語 1—アンケート調査編—. 三省堂.
- 国立国語研究所. (2003). 学校の中の敬語 2—面接調査編—. 三省堂.
- 国立国語研究所. (2006). 言語行動における「配慮」の諸相. くろしお出版.
- 国立国語研究所. (2007). 地域社会の言語生活—鶴岡における 20 年間隔 3 回の継続調査—. 国立国語研究所.
- 宮治弘明. (2003). 方言のしくみ 待遇表現. 小林隆・篠崎晃一 (編), ガイドブック方言研究 (Pp. 139-158). ひつじ書房.
- Brown, P. & S. Levinson (1987). *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.

連絡先

- 杉戸清樹 〒190-8561 東京都立川市緑町 10-2
国立国語研究所 ssugito@kokken. go. jp
- 朝日祥之 〒190-8561 東京都立川市緑町 10-2
国立国語研究所 yasahi@kokken. go. jp

¹ 本ワークショップは文部科学省科学研究費補助金 (基盤研究 (A)) 「敬語と敬語意識の半世紀 : 愛知県岡崎市における経年調査」課題番号 19202014 研究代表者 : 杉戸清樹) の研究活動の一環として行われるものである。